

CALL授業の課題とリスニングとリーディング能力の養成

—TOEIC教材を利用して—

Practical themes on CALL class and the training of Listening and Reading capability

—By making use of TOEIC materials—

山田 隆敏*

Takatoshi Yamada

I はじめに

国際化時代、マルチメディア機器利用による外国語教授法の進展の試みとして、CALL授業の課題的实践に取り組み、大学の共通教育におけるCALL授業のあり方について言及した。ここにコミュニケーション能力の根幹をなすリスニングとリーディング能力養成における学習ストラテジーについて考察してみた。教材としては、リーディング用に英宝社のReading Preparation Course for the TOEIC Testを採用し、リスニング用に南雲堂のOn Your Marks! TOEIC Test Part 1/ Part 2 Listeningを採用し、リスニングとリーディング学習の中心に、CALL機器利用による課題考察を重点に据えた。

CALL授業重点の調査の理由は、学生の基礎学力の低下傾向と、ビジネス社会における外国語運用能力の要請に応えうる方策の確立と、外国語科としてのCALL授業の運用と実践結果が求められる学内外の諸般の事情があげられる。上記の2テキストは、学生の能力に合致したもので、本学の語学教育の一般的なコミュニケーション能力の判定に最適なものである。

II 研究対象クラス（2クラス）

①科目名：英語ⅢE（資格英語向）32名——本編では「EA」クラスと呼称する。

- ・テキスト＝ Reading Preparation Course for the TOEIC Test（英宝社）
- ・このクラスの授業の位置付け：週1回90分授業。2回生以上。TOEIC試験のReading

Sectionのクラス（文法・語彙問題／誤文訂正問題／読解問題）。読み書くことに焦点をあてた授業。可能なかぎりメディア情報（新聞・テレビ&ラジオ）に精通することを義務付ける。成功の秘訣は予習50％／授業20％／CALL機器の利用10％／小テスト20％。

・このクラスの学生バランス：必修生26名。自由選択生6名

②科目名：英語ⅢE（資格英語向）43名——本編では「EB」クラスと呼称する。

・テキスト＝ On Your Marks! TOEIC Test Part 1/Part 2 Listening（南雲堂）

・このクラスの授業の位置付け：週1回90分授業。2回生以上。TOEIC試験のListening Sectionのクラス（写真描写問題／応答問題／会話問題／説明文問題）。聴き話すことに焦点をあてた授業。可能なかぎりメディア情報に精通すること義務付ける。成功の秘訣は持ち帰りテープの試聴と予習40％／授業説明10％／CALL機器による自学自習30％／小テスト20％。

・このクラスの学生バランス：必修生32名。自由選択生11名。

* [つぎにこの2クラスの資格取得状況]

(表1 履修学生の各種資格・免許状等の取得内容)

		EA (32名) Standard	EB (43名) Upper-Standard	計
英語検定 (STEP)	準2級	2	5	7
	3級	8	12	20
	4級	6	8	14
TOEIC	300～		1 (315)	1
他の英検		4		4
他の資格	免状など	5	6	11
計 (資格の重複を含む)		25	32	57

* [上記のデータ分析]

EAクラスとEBクラスをStandardとUpper-Standardとにグレード別にしたのは、あくまで上記の表を参考にしたわけではない。次の項目で述べるが、公的な外部機関のテスト結果によって決定したものである。ここでは入学前から、あるいは入学後に取得した調査を分析するものである。

ここで見られる総評としては、両クラスともに「資格を何かしらよく取得している」

のが私の率直な気持ちである。高校段階では大学入学試験の優遇制度として英語検定（STEP）があり、高校においても推進されている状況を勘案してこの実態である。結論として、2級取得者がゼロであることには、若干のショックはあるが、これが本学の実態である。E BクラスにTOEIC 315点の取得者がいたが、短期間の海外留学経験者で、面接と英語による会話診断で、好スコアを記録しており、この学生に焦点を当てつつ本編の分析を進めたい。なおE Aクラスに「他の英検者」が4名いたが、国連英検と全商英検の資格者であった。

* [研究対象2クラスと通常クラスとの語学力構成度比較分析]

- ・この通常クラスの位置付け：英語ⅢC（英文読解向）36名——本編では「E C」クラスと呼称する。週1回90分授業。2回生以上。随筆、文学、大学院対策等の多読読解のクラス。
成功の秘訣は予習50%/授業説明20%/授業参加20%/小テスト10%。
このクラスの学生バランス：必修生30名。自由選択生6名。
- ・ここで研究対象の2クラスと通常の英語ⅢCの学生の英語学力格差を比較し、TOEIC指導にむけ客観的学力測定をおこなった。測定の仕方は各クラス20名に限定し、自由選択学生は全員受験で、その残りはat randomに学生を選出して、合計60名にてデータ分析を行なった。
データテストはG-TELP Level-3（G-TELP日本事務局）を利用した。
表中の文法・聴解・読解の得点は正答数に基づく得点で各100点満点である。総合計は300点満点である。

* [G-TELP TESTの選定理由]

G-TELP（General Test of English Language Proficiency）は、英語を外国語として学ぶ人達の実用的な英語運用能力を測定し評価するために開発されたシステムである。大学及び短大などの高等教育機関において、プレースメントテストや熟達度テストとして採用されている。

上記のような実情を踏まえ、履修学生のgood & bad pointsを正確に把握し、その内容にあった教育方針を建てるべくこのテスト形式を採用した。また、文法・聴解・読解の3セクションはTOEICのテスト内容とも合致し、且つ、英語検定（STEP）にも該当する観点からこのテストを決定したのである。

・ G - TELP試験内容

幅広い受験者層の英語能力を測定するため、5段階（日本では4段階）にレベル設定。	
Level 1	Authentic English in Complex Communication. <海外ビジネス向き> ネイティブと高度で複雑なコミュニケーションが可能。
Level 2	Authentic and Modified English in Normal communication. <国内ビジネス向き> ネイティブと支障のないレベルでのコミュニケーションが可能。
Level 3	Basic English in Normal Communication <標準大学向き> 日常生活の限られた範囲の表現方法を用いてネイティブとコミュニケーションが可能。
Level 4	Basic English in Simple Communication <短期大学向き> 形式的な表現方法を用いて、ネイティブと簡単なコミュニケーションが可能。

・ G - TELP, Level 1～4の内容

(表2 問題内容と時間構成)

	Level 1		Level 2		Level 3		Level 4	
	問題数	時間	問題数	時間	問題数	時間	問題数	時間
Grammar			26問	20分	22問	20分	20問	20分
Listening	30問	30分	26問	30分	24問	20分	20問	15分
Reading & Vocabulary	60問	75分	28問	40分	24問	35分	20問	30分
Total	90問	105分	80問	90分	70問	75分	60問	65分

・ G - TELP/TOEIC/STEP/TOEFL間の相関関係

(表3 4つの検定試験における相関判定基準)

G - TELP	TOEIC	STEP	TOEFL
Leve 1	990点	1 級	650点
	900点		
Leve 2	800点	準 1 級	600点
	700点		
Leve 3	600点	2 級	550点
	500点		
Leve 4	400点	準 2 級	500点
	300点		
	300点	3 級	400点
	200点		

* [G-T E L P、Level-3によるテスト成績結果とE A / E B / E Cクラス間の相関表]

(表4 研究対象クラスと通常クラスとの対照とクラスプレースメント資料)

	文 法			聴 解			読 解			総合計
	平均点	最高点	最低点	平均点	最高点	最低点	平均点	最高点	最低点	
EA	34.22	56	12	38.18	60	10	53.37	71	25	125.8
EB	42.17	52	22	45.34	68	18	52.18	68	31	139.7
EC	35.46	61	7	36.27	52	15	50.44	75	27	122.2

・上記のデーター分析

研究対象の「E Aクラス」と通常クラスの「E Cクラス」の成績を比較すると、通常クラスで履修した学生は、予想外に、英語力の高い学生が多いのである。

しかしながら、これらのデーターは、如実に素直なデーターを我々に提供してくれる。データーの分析をすれば、TOEICのReading主体のE Aクラスは「読解セクション」で1位を確保し、TOEICのListening主体のE Bクラスは「聴解セクション」で1位を確保し、通常クラスで多読主体のE Cクラスは「文法セクション」でE Aクラスを抜いて2位を占めている。

統計的にみてつぎの問題点が上げられる。1つは、履修学生が講義要項とか、クラブの先輩がたの説明によって、選択クラスを決めている様子がうかがい知れる。E AとE CはReading主体のクラスであるが、E AにはCALLクラスでの実習が伴っていることで、両クラス間にて若干の揺り戻しがあり、機器苦手の学生がE A→E Cクラスに移動したものと推測できる。

2つめは、3クラスともに各セクションの最高点と最低点の間に、大きな落差が見て取れる点にある。即ち、能力差が大きく存在していることが、これらのデーターで明示されており、今後はできうるかぎり速やかな少人数クラスの対策が望まれる。

Ⅲ 本研究の目的

この研究の目的は、次の4点である。

1. 国際化と情報化の進展により、英語により情報の発信がと受信が、またその能力養成が求められる時代の要請にたいして、それに対応しうる英語教育の可能性を探求する。
2. 英語教育に対するさまざまな大学内外の要請に応じて受信及び発信能力の学生実態を調査分析する。分析結果に従って、多様な学生の実態に柔軟に対応できるカリキュラムの編

成を速やかに、弾力的に実施する。

3. 本学の実態に合致した語学教育の根幹を担うものとして、CALL機器の利用と、インターネットによるup-to-dateな情報の受信及び発信形態による効果的言語教育の有様を探る。
4. 18才人口の減少を目前にして、高大間の連携とか、生涯教育向けのカリキュラム作りとか、さらに新しい試みとして、小・中・高の「総合学習の時間」にむけての外国語教育の方向性を探る。

この目的を達成するために、本研究では、つぎのような取り組みを検討する。

- (1) 英語教育に関するカリキュラム作成の教科内チェックシステムの構築。
- (2) 英語教育に関するCALL教育・カリキュラム作成のワーキングチームの構築。
- (3) 発信&受信運用英語の促進に務め、学生にたいして各種資格試験の啓蒙につとめる。

Ⅳ 研究対象クラスの授業内容

1. EAクラスの場合： 10分 各自のモニター画面へのYahooなどからのニュース記事。
学生→教師：挙手、指名または回答ペーパーにて処理
- [90分の授業展開] 10分 TOEIC READING WORDS集からの語彙テストの実施
- 20分 CALL機器を用いてのペアワーク&ワークシヨップ。
これは優れた効果があり、情報交換とともに、能動的な一体感を学生たちに与える副次的効果が生れる
- 20分 現実的なテーマを与えてのペア・トーク演習
(教員はモニター&インカムにて対応)
- 20分 ポーズ・スラッシュ読解理解演習 (TOEIC読解問題利用)
CALL機器を用いて内容語中心の速読実践と解答。
- 10分 テーマによるTWO-MINUTE SPEECH (3～5グループ)
つぎのレッスンへの指示連絡 (IN ENGLISH)

[授業内容] TOEICの読解問題の傾向としていえることは、限定的な時間内に、スキミングとスキヤニングと多様なストラテジーを駆使して、瞬時に判定を下さねばならない程に、出題傾向の難化が激しいのである。

さらに求められるのは、最近の学生には特に不得手である集中力と、日々マスメディア情報に精通しておくことである。しかしながら、これは何もREADING SECTIONだけに限ったものでなく、LISTENING SECTION & GRAMMAR SECTIONにも該当することである。

既存の教材によるTOEICテストを実施した統計によると、総合点で100点以上もの伸びと、READING SECTIONでは平均25点以上のクラスの

伸びがあり、着実な進歩がみられた。

2. EBクラスの場合： 10分 CNNからのニュースを視聴して、英語による発表。
CALL機器の利用。
- [90分の授業展開] 10分 TOEIC LISTENING WORDS集からの語彙テスト
20分 ペア・ワークショップ（マイクまたはヘッドホンから流れる
音声をペアで聴いて、両者で解答を競う。速聴速解形式。
CALL機器利用。
20分 教員による説明と質疑応答
20分 フラッシュカードを与えてのペアスピーチ
10分 教員による次週への指示と宿題と課題（IN ENGLISH）

[授業内容] リスニング能力の養成は、「学生にイメージ・ストラテジーを持たせられたかどうかだ」といわれる場合もある。「始めから終わりまでさっぱり分からない」とトラウマ的な学生に対する場合、興味付け対策によってその劣等感を払拭して後、レベルアップを計る必要な場合が近年多くなっている。

《リスニング・ストラテジー》

- ① 集中して、ヘッドホンまたはマイクの英語を聴く。
- ② 聞き取れた部分から、内容全体を想像する。
- ③ 重要な単語と重要表現を聞き取れる修練。
- ④ 「話題性、すなわち山勘を働かせる」
- ⑤ リスニングではpre-とpost-の訓練が肝要である。

市販教材によるTOEICの総合点で、120点以上の伸びがあり、LISTENING SECTIONでは50点以上の伸びが見られ、さらにCALL機器の貢献度ありと判断できうるデータを得たのである。

ここに、講義終了後半年経過後、履修前315点だった学生のTOEIC SCOREは驚くべきことに、550点まで伸びていた。これは本人の精進もさることながら、学生本人が日頃からCALL機器で練習聴いていた事実が、上記の好結果につながったものである。（ただし、このスコアは公式なTOEIC SPによる数値であることを付記する）。結果論として、全体のレベルアップが顕著に見られたことは、好ましい事である。現在受験中の7名の結果が待ち遠しい。

V CALL授業におけるアンケート内容と分析

研究対象2クラスの「CALL授業アンケート内容」について、その実態と分析結果を報告する。

(表5 CALL授業に対する反応)

	EA (32名)		EB (43名)	
	人数	%	人数	%
(1) 必要と思うからぜひ履修を続けたい	11	34.4%	15	34.9%
(2) 履修可能なら続けたい	8	25.0%	12	27.9%
(3) 良かったが今は何ともいえない	7	21.9%	10	23.3%
(4) この授業で十分で、履修したくない	3	9.4%	2	4.7%
(5) この授業はいやである	2	6.3%	2	4.7%

(表6 CALL授業での独学形態・ボックス型について)

(1) 独自のスペースとペースで効果大	10	31.3%	12	27.9%
(2) 通常授業と違って効果自己確認	12	37.5%	14	32.6%
(3) 機器の使用いまいちだが、効果あり	5	15.6%	10	23.3%
(4) 機器は最高だが、苦手意識払拭不能	3	9.4%	3	7.0%
(5) CALL授業は良くなかった	0		2	4.7%

(表7 CALL授業でのリーディング練習と教材について。複数<2回>解答可)

(1) 通常教室よりも非常に役立った	15	46.9%	23	53.5%
(2) 機器利用の多様性はとても効果大	20	62.5%	33	76.7%
(3) いろんな教材利用で効果あった	28	87.5%	16	37.2%
(4) 黙読よりも視読・聴読の効果大	8	25.0%	21	43.0%
(5) 能力に適應せず、役立っていない	10	31.3%	14	32.5%

(表8 CALL授業でのリスニング練習と教材について。複数<2回>解答可)

(1) 通常教室よりも非常に役立った	18	56.2%	32	74.4%
(2) 機器利用の多様性は役に立った	26	81.3%	36	83.7%
(3) 多様な視聴覚教材利用は効果大きい	28	87.5%	34	79.1%
(4) ポーズ&内容語の練習に役立った	12	37.5%	15	34.9%
(5) 能力に適應せず、役立たなかった	14	43.8%	10	23.3%

(表9 CALL授業の最重要ポイントの予習の有無)

	EA (32名)		EB (43名)	
	人数	割合	人数	割合
(1) 週3時間以上	2	6.3%	7	16.3%
(2) 週2時間位	4	12.5%	3	7.0%
(3) 週1時間位	12	37.5%	15	34.9%
(4) 週30分程	4	12.5%	3	7.0%
(5) まったくやらない	8	25.0%	12	27.9%

(表10 CALL授業での問題提起と改善点。2クラス合同集計)

(1) CALL機器利用しての「資格英語」重視のクラスなら、毎週続けてCALL教室を利用したい
(2) CALL機器利用しての「予習と復習」がしにくい。第2CALL教室の増室を強く望む。
(3) CALL機器の正常な作動確保と、授業の効果的な流れを維持するため、事務員の配置を望む。
(4) CALL機器による円滑なる運用指導のため、TA教員もしくは大学院学生の配置を望む。
(5) CALL教室内の多様な機器の放課後（5時限）の利用方法を早急に検討してほしい。
(6) CALL授業はとても実践的で、TOEIC/TOEFLなどの自習に、常時の使用は無理か。
(7) CALL授業内で、自然と自己評価と自己点検が可能になり、語学力の補強に目処が見ついた。

VI CALL授業におけるアンケート内容（表5～表10）に関する分析結果

【表5】 続けてCALL授業の継続を望む学生は、EA（80%）EB（84%）にも達している。この数値には、純粋に喜ぶべきであるが、その反面、CALL授業苦手の学生がEA（15%）EB（9%）いる事実を忘れてはならない。

【表6】 CALL授業の特色の1つは、自学自習のやり方である。教員がモニターを行なうも、あくまで、学生の自主性を重んじるやり方も、個人差の大きい語学教育の実情では最も大事なmethodである。EA・EBの両クラスとも、このmethodを80%以上の学生が支持してくれている。

【表7】 国際化の時代の中で、情報公開の根幹となる文書表現能力の養成と、コミュニケーション能力の向上には、CALL機器を利用したリーディング演習による自己確認ストラテジーが効果を発揮する。多様なリーディング資料による語学指導が効果を発揮し、学生にやる気を促したと考えられる。ただ、EAでは3が87.5%、EBでは2が76.7%と視点を変えて高い%をえたことは興味深いデータといえよう。

【表8】 上記の【表7】のデータとの比較で気付くものは、80%以上もの高い支持が多いことにある。さらに、EAの学生もリスニングの重要性に高い支持を与えているこ

とである。

家庭では学習しにくい分野のため、多様な視聴覚資料を付与した結果が、このような数値になっているのであろう。しかしながら、この分野に対応できない学生が、EAでは(43%)、EBでは(23%)存在しており、この数値は教員としての検討材料である。なお、EBの数値がEAの半分であることは、クラスの構成上からみると、妥当なものである。

【表9】 CALL教材を利用しての家庭またはキャンパス内での自習度合いを尋ねたデータである。まったく予習をしていない学生が、両クラスともに30%近くいたことは反省の材料である。ただCALL教室を授業以外で自由に使用できうる可動状態にして、意欲あるものの自主学習を促すシステムづくりは、大学としての課題である。CALL教室に常勤の職員(TA含む)のシステム作りを望むものである。

【表10】 積極的な学生がかなり多い実態がデータとして提示されたわけであり、CALL教室のさらなる拡充が求められる。語学教員として大学当局に要請すべき事柄を、逆に、学生らから提示されたのが、【表10】の内容である。外国人による語学会話クラスとともに、CALL授業の拡充と第2CALL教室の設置は、高等教育機関の語学教育に、望まれる責務と言えるものである。

Ⅶ 終わりに

CALL機器の特性を最大限に利用したExtensive Reading形式のEAクラスと、多様なリスニング教材を利用してのEBクラスの初期の目的は、これまでの【表1～表10】のデータの裏付けによって達成された。学生の成績が、TOEICの総合点で230点以上の伸びを見せた学生TOEIC550点の存在に触発されて、クラスの学習雰囲気の前向きに転換していった。この事実は、この研究成果の最後を飾るに相応しい事柄である。

今後は教員として、学生の学習環境をよりよく改善しつつ、より効果的なCALL教育の実践に向けて日々自己研鑽を積み重ねなければならない。

*本稿は、平成12年度奈良大学研究助成を受けて行なった研究の一部である。ここに記して改めて感謝いたします。

参考資料

- 1) 外国語教育メディア学会編『Language Education & Technology, vol.39』2002年
- 2) 財団法人日本英語検定協会編『STEP '98英語情報』1998年

- 3) 財団法人日本英語検定協会編『STEP BULLETIN, vol.9』1997年
- 4) 研究社出版編『大学生の英語学習ハンドブック』1999年
- 5) TOEIC運営委員会編『TOEIC活用実態報告・第1回』2001年